

—しゅんぎく—

しゅんぎく

—— 発病・加害時期
 === 発病・加害最盛期

作型・病害虫名 \ 月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
春まき / 秋まき (ハウス)				●	■	■			●	■	■	
秋まき					●	■			●	■	■	
夏まき						●	■	●	■			
べと病												
葉枯病												
炭疽病												
萎凋病												
アブラムシ類												
ヨトウムシ類												
ハモグリバエ類												

べと病

留意事項

- 1 低温多雨時に発生が多い。

防除方法

- 1 密植を避け、通風を良好にする。
- 2 排水を良好にし、過湿を避ける。
- 3 施設では、換気を良好にする。
- 4 被害茎葉を早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 5 発生が見込まれる時期に、予防的に下記の薬剤を散布する。
 - ・ [クプロシールド](#) <M1> 【野菜類 1000～2000倍 発病前～発病初期／－】
 - ・ [Zボルドー](#) <M1> 【野菜類（除キャベツ） 500倍 －／－】

葉枯病

留意事項

- 1 高温多湿で発生しやすい。
- 2 水はねによって病原菌が伝搬し、蔓延することが多いので注意する。
- 3 SDHI剤<7>は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

防除方法

- 1 密植を避け、通風を良好にする。
- 2 排水を良好にし、過湿を避ける。

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- 3 窒素過多を避ける。
- 4 雨よけを行う。
- 5 被害株は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 6 発生が認められる時期に、予防的に下記の剤を散布する。
 - ・ [アフエットフロアブル](#) ≪ 7 ≫ 【2000倍 7日／3回】

炭疽病（たんそびょう）

留意事項

- 1 アミスター20フロアブル、ストロビーフロアブルは、薬害のおそれがあるため、浸透性を高める展着剤を加用しない。
- 2 QoI剤≪ 1 1 ≫は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

防除方法

- 1 種子伝染を防ぐため、採種から1年以上経過した古い種を用いる。
- 2 密植を避け、通風を良好にする。
- 3 排水を良好にし、過湿を避ける。
- 4 窒素過多を避ける。
- 5 雨よけを行う。
- 6 被害株は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 7 発生が認められる時期に、予防的に下記の剤を散布する。
 - ・ [アミスター20フロアブル](#) ≪ 1 1 ≫ 【2000倍 前日／2回】
 - ・ [スクレアフロアブル](#) ≪ 1 1 ≫ 【2000倍 前日／3回】
 - ・ [ストロビーフロアブル](#) ≪ 1 1 ≫ 【3000倍 14日／3回】

萎凋病（いちょうびょう）

留意事項

- 1 連作により発病しやすい。
- 2 高温期に多発する。地温の低下により発病が減少し、15℃以下では発病しなくなる。
- 3 茎の導管部の褐変が見られる。
- 4 過剰な施肥により発生が助長される。

防除方法

- 1 連作および過剰な施肥を避ける。
- 2 被害株は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 3 施設では夏期高温時に、太陽熱利用による土壌消毒を行う。（ⅩⅢ土壌消毒 1太陽熱利用による土壌消毒（太陽熱消毒） 参照）
- 4 以下の薬剤による土壌消毒を行う。（ⅩⅢ土壌消毒 2土壌病害虫等を対象とした薬剤による土壌消毒（4） 参照）

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- ・ [バスアミド微粒剤](#)、[ガスタード微粒剤](#) 劇 <ー>
【20kg／10a 均一に散布して土壌と混和 は種21日前／1回】

アブラムシ類

留意事項

- 1 スタークル顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤の成分ジノテフランの総使用回数は3回以内（但し、は種時及び定植時の土壌混和は合計1回以内、散布は2回以内）。

防除方法

- 1 施設の開口部を寒冷しゃや防虫ネット（目合い0.8mm以下）で被覆する。
- 2 露地では被覆資材を用いてべたがけ栽培、トンネル栽培を行う。
- 3 ほ場内や周辺部の除草を徹底する。
- 4 下記の薬剤を施用する。
 - ・ [ダントツ粒剤](#) <4 A> 【6kg／10a まき溝処理土壌混和 は種時／1回】
- 5 発生を認めたら下記の薬剤を施用する。
 - ・ [スタークル顆粒水溶剤](#)、[アルバリン顆粒水溶剤](#) <4 A> 【3000倍 前日／2回】
 - ・ [モスピラン顆粒水溶剤](#) 劇 <4 A> 【8000倍 3日／2回】
 - ・ [アディオン乳剤](#) <3 A> 【4000倍 21日／2回】
 - ・ [ウララDF](#) <2 9> 【4000倍 前日／2回】
 - ・ [サンクリスタル乳剤](#) <ー> 【300倍 前日／ー】

ヨトウムシ類

留意事項

- 1 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

防除方法

- 1 施設の開口部を寒冷しゃや防虫ネット（目合い4mm以下）で被覆する。
- 2 露地では、被覆資材を用いてべたがけ栽培、トンネル栽培を行う。
- 3 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [アフーム乳剤](#) <6> 【シロイチモジヨトウ 2000倍 7日／2回】
 - ・ [コテツフロアブル](#) 劇 <1 3> 【ハスモンヨトウ 2000倍 14日／2回】
 - ・ [ディアナSC](#) <5> 【ハスモンヨトウ 2500～5000倍 前日／2回】
 - ・ [プレオフロアブル](#) <UN> 【ハスモンヨトウ 1000倍 前日／2回】
 - ・ [カスケード乳剤](#) <1 5> 【ヨトウムシ・ハスモンヨトウ 2000～4000倍 7日／2回】
 - ・ [BT剤](#) <1 1 A> （IX野菜類の病害虫防除 3野菜類 参照）

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

ハモグリバエ類

留意事項

- 1 施設内では1年中発生する。
- 2 スタークル粒剤、アルバリン粒剤の成分ジノテフランの総使用回数は3回以内（但し、は種時及び定植時の土壌混和は合計1回以内、散布は2回以内）。

防除方法

- 1 施設では、収穫後（5～10月の晴天が続く日）にうね全面をビニルで被覆し、地表下の温度を上げて地中の蛹を殺す。
- 2 収穫後の作物残さは集めてビニルで覆っておくと、成幼虫を殺虫することができる。
- 3 施設の開口部を寒冷しゃや防虫ネット（目合い0.8mm以下）で被覆する。
- 4 施設の被覆資材として近紫外線カットフィルムを利用し、虫の行動を抑制する。
- 5 露地では被覆資材を用いてべたがけ栽培、トンネル栽培を行う。
- 6 ほ場内や周辺部の除草を徹底する。
- 7 ハモグリバエ類が発生しにくい作物（イネ科作物等）と輪作を行う。
- 8 下記の薬剤を施用する。
 - ・ [スタークル粒剤](#)、[アルバリン粒剤](#) ＜4 A＞
【9kg／10a まき溝土壌混和 は種時／1回】または
【9kg／10a 植溝土壌混和 定植時／1回】
 - ・ [ダントツ粒剤](#) ＜4 A＞
【6kg／10a まき溝処理土壌混和 は種時／1回】
- 9 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [アフーム乳剤](#) ＜6＞【2000倍 7日／2回】
 - ・ [ディアナSC](#) ＜5＞【2500～5000倍 前日／2回】
 - ・ [カスケード乳剤](#) ＜15＞【マメハモグリバエ 2000～4000倍 7日／2回】

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。